

美術工芸の進展と充実

小松市域の美術作家の活動団体でもある小松美術作家協会が設立されて半世紀になり、小松美術展やまた各種の中央展に出品する作家も多く、その活動は活発である。三代藩主前田利常が隠居し小松城に入城、産業振興をはかり諸職人を集めたことや、また江戸時代後期には若杉窯や小野窯・蓮代寺窯などの陶業が興り、多くの名工が育ったことにも起因する。

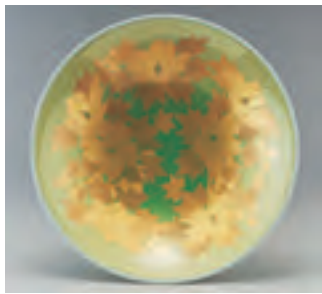
陶芸では、蓮代寺窯を開いた松屋菊



二代浅蔵五十吉作「釉彩瑞鳥の譜飾皿」(小松市立博物館所蔵)



三代徳田八十吉作「耀彩大皿・黎明」(小松市立博物館所蔵)



吉田美統作「釉裏金彩芙蓉文鉢」(小松市立博物館所蔵)

三郎の子で、父に九谷焼の上絵を学び、また多くの門弟を育て、海外輸出にも意を注いだ松本佐平(大正七年没)。佐平の養子の初代松本佐吉(昭和十七年没)。初代佐吉の養子で九谷焼の伝統技法と独自の釉裏金彩の技法をよくした二代松本佐吉(昭和六十三年没)。松本佐平に学び独立し、古九谷五彩の絵の具の再現と吉田屋風の作風をも得意とした初代徳田八十吉(昭和三十一年没)。初代八十吉の養子の二代徳田八

十吉(平成九年没)。
初代・二代

八十吉に学び、殊に初代の絵の具を継承、さ

らに発展させ彩釉磁器で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された三代徳田八十吉(平成二十一年没)。九谷焼の世界に細字の分野を切り拓いた田村金星(昭和六十二年没)。初代徳田八十吉や北出塔次郎に学び、深みのある黄色の絵の具や気品のあるプラチナ彩色を創案、日本芸術院会員や文化勲章にも輝いた二代浅蔵五十吉(平成十年没)。家業の錦山窯三代目を継ぎ、釉裏金彩の技法で重要無形文化財保持者に認定された吉田美統をはじめ、現役で活躍する作家も多く、この分野は層が厚い。

金工は、藩政時代の明和年間(一七六四〜七二)、滝本次右衛門(文化六年没)が鋳物を製し、高辻小納言の御用をうけ、「石見」の称号が与えられた。



宮本三郎作「婦女三容」(宮本三郎美術館所蔵)

彫の技を身に付け、後に金沢で漆工芸の堆朱に独自の作風を開拓した彫師の吉田棟堂(昭和六十一年没)がいた。彫刻では、木彫の分野で

その流れは明治時代に蠟型鑄物の名工である秋山喜平を生み、「柴牛」など動物の置物を得意とした。また仏具や花器・香炉など、唐銅鑄造を研究した藤本政吉がいた。また砂張の研究に打ち込み、銅鑼で重要無形文化財保持者に認定された初代魚住為楽(昭和三十一年没)を輩出した。

現在活躍する小松の美術工芸家たち

	氏名	作風・功績	
陶	四代徳田八十吉	父の技を継承。清雅な自身の彩釉の世界を発表	
	田村敬星	父の技の継承と独自の色絵の世界を追求	
	三代浅蔵五十吉	二代五十吉の長男。重厚な作風を受け継ぐ	
	浅蔵正博	二代五十吉の次男で緑釉と銀彩の世界を融合	
	谷口 勇	九谷焼の伝統と革新を探索	
	宮川哲爾	初代宮川英吉と二代宮川永福の陶技を継ぎ、九谷焼の色絵付に確かな筆致をみせる	
	宮本忠夫	九谷焼の伝統的画風に定評がある	
	宮本雅夫	父忠夫に学び、独特の黄地紅彩の世界を展開	
	長谷川紀代	研ぎすまされた感性を色絵の世界に投影	
	吉田美統	釉裏金彩の技法で重要無形文化財保持者に認定	
	吉田幸央	柔らかな淡い色彩効果の世界を展開	
	越田健一郎	九谷焼に新しい息吹を吹き込む	
芸	吉田荘八	九谷焼の色絵の世界に新生面を追求する	
	北村 隆	重厚な作風の構築に加え、軽妙な世界をも探索	
	高 権成	父陶岳に学び、鉄釉技法を我がものとする	
	中田一於	独自の釉裏銀彩の手法を展開	
	下道良平	確かな轆轤技術と染付に定評がある	
	木田弘之	鮮烈な造形感覚の作品を発表	
	田島正仁	三代八十吉に学び、彩釉の世界を探索	
	堂前忠正	独自の青磁の世界を展開	
	新藤 晋	清新な青釉の技法の展開とともに大きな視野で活躍	
	村中暁美	独特の幾何学的な風車文で個性を發揮	
	彫刻	宮本直樹	彫塑の技法を陶磁器の世界にも発揮
	日本画	今村文男	能面や能を演じる人物など、幽玄の世界を表現
阿戸猛子		堅実な風景画に確かな筆致をみせる	
洋画	鈴木治男	「熱い抽象」と称される作風に新境地を拓く	
	安田 淳	抽象を追い続ける	
	曾我 章	車などの解体現場に自身を投影	
	新保基平	叙情的な独特の具象の世界を展開	
	西田洋一郎	独自の抽象の世界を繰り広げる	

(順不同)

活躍した村上九郎作(大正八年没)がいた。明治二十年(一八八七)、第二回内国博覧会に鏡縁彫刻を出品して三等賞を受賞し、一躍注目をうけ、後に石川県工業学校教諭、高岡工芸学校校長を務めた。朝倉文夫に師事し、動物から人物像、仏像と幅広く手がけ、ハニベ巖窟院を創設した金沢出身の都賀田勇馬(昭和五十六年没)も知られている。

日本画では、難聴ながらも大阪の岡本大更と京都の橋本関雪に師事し、人物画や仏画に独自の画境を示した二本紫石(昭和五十四年没)が活躍した。洋画では、宮本三郎(昭和四十九年没)が著名である。上京して藤島武二の指導をうけ、また安井曾太郎に師事、第二次世界大戦の折、従軍画家として活躍、一躍名をなし、後に日本芸術院会員となった。ほか西出外佑(平成十二年没)、高光一也に師事し、女性の裸婦で境地を拓いた松本昇(平成二十一年没)などがいた。(北春千代)